

森
鷗
外

妄
想



妄

想

目前には広々と海が横よこたわっている。

その海から打ち上げられた砂が、小山のように盛り上がって、自然の堤防を形づくっている。アイルランドとスコットランドとから起って、ヨオロッパ一般に行われるようになった **DES** という語ことばは、こういう処さを斥さして言うのである。

その砂山の上に、ひよろひよろした赤松が簇むらがって生はえている。余り年を経た松ではない。

海を眺めている白髪の主人は、この松の幾本かを切つて、松林の中へ嵌め込んだように立てた小家の一間に据わっている。

主人が元と世に立ち交っている頃に、別荘の真似事のような心持で立てたこの小家は、只二間と台所とから成り立っている。今据わっているのは、東の方一面に海を見晴らした、六畳の居間である。

据わっていて見れば、砂山の岨が松の根に縦横に縫われた、殆ど鉛直な、所々中窪に崩れた断面になつているので、只果もない波だけが見えているが、この山と海

との間には、一筋の河水かわみずと一帯の中洲なかすとがある。

河は迂回うかいして海に灌そそいでいるので、岨の下では甘い水と鹹からい水とが出合っているのである。

砂山の背後うしろの低い処には、漁業と農業とを兼ねた民家が疎まばらに立っているが、砂山の上には主人の家が只一軒あるばかりである。

いつやらの暴風に漁船そうが一艘跳ね上げられて、松林の梢こずえに引ひつ懸かかっていたという話のあるこの砂山には、土地のものは恐れて住まない。

河は上総かずさの夷瓢川いしみがわである。海は太平洋である。

秋が近くなつて、薄靄うすもやの掛かっている松林の中の、清い砂を踏んで、主人はそこらを一廻りめぐして来て、八十八やそはちという老僕の拵こしらえた朝餉あさげをしまつて、今自分の居間に据わつたところである。

あたりはひっそりしていて、人の物を言う声も、犬の鳴く声も聞えない。只朝凧あさなぎの浦の静かな、鈍い、重くろしい波の音が、天地の脈みやくはく搏たたくのように聞えているばかりである。

丁度わたり径一尺位に見える橙とうおう黄色の日輪が、真向うの水と空と接した処から出た。水平線を基線にして見ている

ので、日は必ずんずん升のぼって行くように感ぜられる。

それを見て、主人は時間ということを考える。生ということを考える。死ということを考える。

「死は哲学の為ために真の、氣息を嘘ふき込む神である、導きの神 (Musagetes) である」と Schopenhauer シヨオペンハウエル は云った。

主人はこの語ことばを思い出して、それはそう云っても好かろうと思う。しかし死というものは、生というものを考えずには考えられない。死を考えるとというのは生が無くなる^と考えるのである。

これまで種々の人の書いたものを見れば、大抵老が迫

つて来るに連れて、死を考えるとということが段々切実になる。と云っている。主人は過去の経歴を考えて見るに、どうもそういう人々とは少し違ふように思う。

*

*

*

自分がまだ二十代で、全く処女のような官能を以て、外界のあらゆる出来事に反応して、内には嘗て挫折したことの無い力を蓄えていた時の事であった。自分は柏林にいた。列強の均衡を破って、独逸という野蛮な響の詞

にどっしりした重みを持たせたウイルヘルム第一世がま
 だ位におられた。今のキルヘルム第二世のように、
デモオニシユ
しも
 dämonisch な威力を下に加えて、抑えて行かれるのでは
 なくて、自然の重みの下にもと社会民政党は喘ぎあえ悶もだえていた
 のである。劇場では エルンスト フォン キルデンブルツホ Ernst von Wildenbruch が、あの
ホオヘンツオルレルン
 Hohenzollern 家の祖先を主人公にした脚本を興行させ
 て、学生仲間の青年の心を支配していた。
ラボラトリウム
 昼は講堂や Laboratorium で、生き生きした青年の間に
 立ち交って働く。何事にも不器用で、癡重ちちようというような
ヨオロッパ
 処のある欧羅巴人をしの凌いで、軽捷けいしやうに立ち働いて得意が

るような心も起る。夜は芝居を見る。舞踏場にゆく。それから珈琲店コオフィイに時刻を移して、帰り道には街燈だけが寂しい光を放って、馬車を乗り廻す掃除人足が掃除をし始める頃にぶらぶら帰る。素直に帰らないこともある。

さて自分の住む宿いえに帰り着く。宿と云っても、幾竈いくかまどもあるお家の入口の戸を、邪魔になる大鍵おおかぎで開けて、三階か四階へ、蠟ろうマツチを擦すり擦り登って行って、ようよう *chambre garnie* の前シヤンブル ガルニイに来るのである。

高机一つに椅子いす二つ三つ。寝台ねだいに箆たんす笥すに化粧棚。その外にはなんにもない。火を点ともして着物を脱いで、その火

を消すと直ぐ、寝台の上に横になる。

心の寂しさを感じるのはこういう時である。それでも神経の平穏な時は故郷の家の様子がおもかげ 倂ねいに立って来るに過ぎない。その幻を見ながら寝入る。Nostalgiaノスタルギア は人生の苦痛の余り深いものではない。

それがどうかすると寐附かれない。又起きて火を点して、為事しごとをして見る。為事に興が乗って来れば、余念もなく夜を徹してしまふこともある。明方近く、外に物音がし出してから一寸寐ちよつとても、若い時の疲労は直ぐ恢かい復ふくすることが出来る。

時としてはその為事が手に附かない。神経が異様に興奮して、心が澄み切っているのに、書物を開^あけて、他人の思想の跡を辿^{たど}って行くのがもどかしくなる。自分の思想が自由行動を取って来る。自然科学のうちで最も自然科学らしい医学をしていて、エクサクト exact な学問ということをしてい^{せいめい}性命にしているのに、なんとなく心の飢を感じて来る。生というものを考える。自分のしている事が、その生の内容を充たすに足るかどうだかと思う。

生れてから今日まで、自分は何をしているか。始終何物かに策^{むち}うたれ駆られているように学問ということに齧^{あく}

齧せくしている。これは自分に或る働きが出来るように、自分を為し上あげるのだと思っっている。その目的は幾分か達せられるかも知れない。しかし自分のしている事は、役者が舞台へ出て或る役を勤めているに過ぎないように感ぜられる。その勤めている役の背後うしろに、別に何物かが存在していなくてはならないように感ぜられる。策うたれ駆られてばかりいるために、その何物かが醒せい覚かくする暇がないように感ぜられる。勉強する子供から、勉強する学校生徒、勉強する官吏、勉強する留学生というのが、皆その役である。赤く黒く塗られている顔をいつか洗って、

一寸ちよつと舞台から降りて、静かに自分というものを考えて見たい、背後うしろの何物かの面目のぞを覗いて見たいと思ひ思ひしながら、舞台監督の鞭むちを背中に受けて、役から役を勤め続けている。この役が即ち生だとは考えられない。背後うしろにある或る物が真の生ではあるまいかと思われる。しかしその或る物は目を醒さまそう醒まそうと思ひながら、又してはうとうとして眠ってしまう。この頃折々切実に感ずる故郷の恋しさなんぞも、浮草が波に揺られて遠い処へ行って浮いているのに、どうかするとその揺れるのが根に響くような感じであるが、これは舞台でしている役

の感じではない。しかしそんな感じは、一寸頭を挙げるかと思うと、直ぐに引っ込んでしまう。

それとは違って、夜寐られない時、こんな風に舞台上で勤めながら生涯を終るのかと思うことがある。それからその生涯というものも長いか短いか知れないと思う。丁度その頃留学生仲間が一人空^チ扶^フ斯^スになって入院して死んだ。講義のない時間に、Charité^{シヤリテエ}へ見舞に行く^{もら}と、伝染病室の硝子^{ガラス}越しに、寐ているところを見せて貰^{もら}うのであった。熱が四十度を超過するので、毎日冷水浴をさせるということであった。そこで自分は医学生だったので、

どうも日本人には冷水浴は危険だと思って、外のものにも相談して見たが、病院に入れて置きながら、その治療方鍼ほうしんに容喙ようかいするのは不都合であろうし、よしや言ったところで採用せられはすまいというので、傍観ゆうべしていることになった。そのうち或る日見舞に行くと昨夜死んだということであつた。その男の死顔を見たとき、自分はひどく感動して、自分もいつどんな病に感じて、こんな風に死ぬるかも知れないと、ふと思った。それから折々このまま伯林ベルリンで死んだらどうだろうと思うことがある。そういう時は、先ず故郷で待っている二親ふたおやがどんなに

歎くだろうと思う。それから身近い種々の人の事を思う。
中にも自分にひどく懐いていた、頭の毛のちぢれた弟の、
故郷を立つとき、まだやっとな歩いていたのが、毎日毎日
兄いさんはいつ帰るかというのを、手紙で言っ
てよこされている。その弟が、若し兄いさんはもう帰ら
ないと云われたら、どんなにか嘆くだろうと思う。

それから留学生になっいて、学業が成らずに死んで
は済まないと思う。しかし抽象的にこう云う事を考えて
いるうちは、冷かな義務の感じのみであるが、一人一
人具体的に自分の値遇の跡を尋ねて見ると、やはり身近

い親戚しんせきのように、自分に **Neigung** ナイグング からの苦痛、情の上の
 感じをさせるようにもなる。

こういうように広狭種々の **social** ソチアル な繫累けいらい的思想が、次
 第もなく簇むらがり起って来るが、それがとうとう **individuell** インジヴィズエル
 な自我の上に帰着してしまう。死というものはあらゆる
 方角から引っ張っている糸の湊合そうごうしている、この自我と
 いうものが無くなってしまうのだと思う。

自分は小さい時から小説が好きなので、外国語を学ん
 でからも、暇があれば外国の小説を読んでいる。どれを
 読んで見てもこの自我が無くなるということとは最も大い

なる最も深い苦痛だと云つてある。ところが自分には単に我が無くなるということだけならば、苦痛とは思われない。只刃物で死んだら、その刹那に肉体の痛みを覚えるだろうと思ひ、病や薬で死んだら、それぞれの病症薬性に相応して、窒息するとか痙攣けいれんするとかくるしい苦みを覚えるだろうと思ふのである。自我が無くなる為めの苦痛は無い。

西洋人は死を恐れないのは野蛮人の性質だと云つてゐる。自分は西洋人の謂いう野蛮人というものかも知れないと思う。そう思うと同時に、小さい時二親が、侍さむらいの家

に生れたのだから、切腹ということが出来なくてはならないと度々論じたことたびたびさとを思い出す。その時も肉体の痛みがあるだろうと思って、その痛みを忍ばなくてはなるまいと思つたことを思い出す。そしていよいよ所謂野蛮人いわゆるかも知れないと思う。併しその西洋人の見解が尤もだと承服することは出来ない。

そんなら自我が無くなるということに就いて、平氣でいるかというに、そうではない。その自我というものが有る間に、それをどんな物だとはつきり考えても見ずに、知らずに、それを無くしてしまふのが口惜くちおしい。残念で

ある。漢学者の謂う酔生夢死というような生涯を送ってしまうのが残念である。それを口惜しい、残念だと思うと同時に、痛切に心の空虚を感ずる。なんともかとも言われぬ寂しさを覚える。

それが煩悶はんもんになる。それが苦痛になる。

自分は伯林ベルリンの garçon logisガルソン ロジイの寐られない夜なかに、幾度いくたび

もこの苦痛を嘗なめた。そういう時は自分の生れてから今までした事が、上辺うわべの徒いたずら事ごとのように思われる。舞台の上の役を勤めているに過ぎなかつたということが、切実に感ぜられる。そういう時にこれまで人に聞いたり本

で読んだりした仏教や基督教クリストの思想の断片が、次第もなく心に浮んで来ては、直ぐに消えてしまう。なんの慰藉いしゃをも与えずに消えてしまう。そういう時にこれまで学んだ自然科学のあらゆる事実やあらゆる推理を繰り返して見て、どこかに慰藉になるような物はないかと捜す。しかしこれも徒労であった。

或るこういう夜の事であった。哲学の本を読んで見ようと思ひ立って、夜の明けるのを待ち兼ねて、ハルトマン Hartmann の無意識哲学を買いに行つた。これが哲学というものを覗のぞいて見た初で、なぜハルトマンにしたかというのと、そ

の頃十九世紀は鉄道とハルトマンの哲学とを齎もたらしたと云った位、最新の大系統として賛否の聲が喧かまびすしかったからである。

自分に哲学の難ありがた有みを感じさせさせたのは錯迷の三期であった。ハルトマンは幸福を人生の目的だとすることの不可能なのを証する為めに、錯迷の三期を立てている。第一期では人間が現世で福さいわいを得ようと思う。少壮、健康、友誼ゆうぎ、恋愛、名誉というように数えて、一々その錯迷を破っている。恋なんぞも主おもに苦である。福は性欲の根を断つに在る。人間はこの福を犠牲にして、纔わずかに世界の

進化を翼成している。第二期では福を死後に求める。それには個人としての不滅を前提にしなくてはならない。ところが個人の意識は死と共に滅する。神経の幹はここに絶たれてしまう。第三期では福を世界過程の未来に求める。これは世界の発展進化を前提とする。ところが世界はどんなに進化しても、老病困厄は絶えない。神経が鋭敏になるから、それを一層切実に感ずる。苦は進化と共に長ずる。初中後の三期を閲し^{けみ}尽しても、幸福は永遠に得られないのである。

ハルトマンの形而上学^{けいじじょうがく}では、この世界は出来るだけ善

く造られている。しかし有るが好いか無いが好いかと云えば、無いが好い。それを有らせる根元を無意識と名付ける。それだからと云って、生を否定したって、世界は依然としているから駄目だ。現にある人類が首尾好く滅びても、又或る機会には次の人類が出来て、同じ事を繰り返すだろう。それよりか人間は生を肯定して、己おのれを世界の過程に委ねて、甘んじて苦を受けて、世界の救拔を待つが好いと云うのである。

自分はこの結論を見て頭を掉ふったが、錯迷打破には強く引き付けられた。Disillusion ジスイリユウジヨン にはひどく同情した。そ

してハルトマン自身が錯迷の三期を書いたのは、**Max**
マックス
 スチルネル

Stirner を読んで考えた上の事であると自白しているの
 を見て、スチルネルを読んだ。それから無意識哲学全体
 の淵源えんげんだといふので、さかのぼって Schopenhauer を読んだ。

スチルネルを読んで見ると、ハルトマンが紳士の態度
 で言っている事を、無頼漢の態度で言っているように感
 ずる。そしてあらゆる錯迷を破った跡あとに自我を残してい
 る。世界に恃たのむに足るものは自我の外には無い。それを
 先きから先きへと考えると、無政府主義に帰着しなくて
 は已やまない。

自分はぞつとした。

シヨオペンハウエルを読んで見れば、ハルトマン・ミ
ヌス・進化論であつた。世界は有るよりは無い方が好い
ばかりではない。出来るだけ悪く造られている。世界の
出来たのは失錯しっさくである。無の安さが誤まって攪乱かくらんせられ
たに過ぎない。世界は認識によつて無の安さに帰るより
外はない。一人一人の人は一箇一箇の失錯で、有るより
は無いが好いのである。個人の不滅を欲するのは失錯を
無窮にしようとするのである。個人は滅びて人間という
種類が残る。この滅びないで残るものを、滅びる写象の

反対に、広義に、意志と名付ける。意志が有るから、無は絶待の無でなくて、相待の無である。意志が カント Kant の物その物である。個人が無に帰るには、自殺をすれば好いかというに、自殺をしたって種類が残る。物その物が残る。そこで死ぬるまで生きていなくてはならないというのである。ハルトマンの無意識というものは、この意志が一変して出来たのであった。

自分はいよいよ頭を掉ふった。

*

*

*

とかくする内に留学三年の期間が過ぎた。自分はまだ均勢きんせいを得ない物体の動揺を心の内うちに感じていながら、何の師匠を求めるとにも便りの好い、文化の国を去らなくてはならないことになった。生きた師匠ばかりではない。相談相手になる書物も、遠く足を運ばずに大学の図書館に行けば大抵間に合う。又買って見るにも注文してから何箇月目に来るなどという面倒は無い。そういう便利な国を去らなくてはならないことになった。

故郷は恋しい。美しい、懐かしい夢の国として故郷は

恋しい。しかし自分の研究しなくてはならないことにな
っている。學術を真に研究するには、その學術の新しい田
地を開墾して行くには、まだ種々の要約の闕かけている国
に歸るのは残惜しい。敢あえて「まだ」と云う。日本に長く
いて日本を底から知り抜いたと云われている独逸人某
は、この要約は今闕かけているばかりでなくて、永遠に東
洋の天地には生じて来ないと宣告した。東洋には自然科
學を育てて行く雰ふん困いき気は無いのだと宣告した。果してそ
うなら、帝国大學も、伝染病研究所も、永遠に欧羅巴ヨオロッパの
學術の結論だけを取り續つぐ場所たるに過ぎない筈はずであ

る。こう云う判断は、ロシアとの戦争の後に、欧羅巴の
当り狂言になっていたタイフンTaifun なんぞに現れている。しか
し自分は日本人を、そう絶望しなくてはならない程、無
能な種族だとも思わないから、敢て「まだ」と云う。自
分は日本で結んだ學術の果実を欧羅巴へ輸出する時もし
つかは来るだろうと、その時から思っていたのである。

自分はこの自然科学を育てる雰囲気のある、便利な国
を跡に見て、夢の故郷へ旅立った。それは勿論立もちろんたなく
てはならなかったのではあるが、立たなくてはならない
という義務の爲めに立ったのでは無い。自分の願望の秤はかり

も、一方の皿に便利な国を載せて、一方の皿に夢の故郷を載せたとき、便利の皿を吊つった緒をそつと引く、白い、優しい手があつたにも拘かかわらず、慥たしかに夢の方へ傾いたのである。

シベリア鉄道はまだ全通していなかつたので、印度洋を経て帰るのであつた。一日行程の道を往復しても、往ゆきは長く、復かえりは短く思われるものであるが、四五十日の旅行をしても、そういう感じがある。未知の世界へ希望を懐いだいて旅立った昔に比べて寂しく又早く思われた航海中、籐との寝椅子に身を横えながら、自分は行李こうりにどん

なお土産みやげを持って帰るかということ考えた。

自然科学の分科の上では、自分は結論だけを持って帰るのではない。将来発展すべき萌芽ほうがをも持っている積りである。しかし帰って行く故郷には、その萌芽を育てる雰囲気が無い。少くも「まだ」無い。その萌芽も徒らに枯れてしまいはすまいかと気遣きづかわれる。そして自分はフアタリスチツシユ *fatalistisch* な、鈍い、陰気な感じに襲われた。

そしてこの陰気な闇やみを照破する光明のある哲学は、我々行李の中には無かった。その中に有るのは、シヨオペンハウエル、ハルトマン系の厭世えんせい哲学である。現象世界を

有るよりは無い方が好いとしている哲学である。進化を認めないではない。しかしそれは無に醒覚せいかくせんが為めの進化である。

自分は錫蘭セイロンで、赤い格子縞こうしじまの布を、頭と腰とに巻き附けた男に、美しい、青い翼の鳥を買わせられた。籠かごを提さげて舟に帰ると、フランス舟の乗組員が妙な手附きをして、「Il ne vivra pas !」と云った。美しい、青い鳥は、果して舟の横浜に着くまでに死んでしまった。それもはかない土産であった。

*

*

*

自分は失望を以て故郷の人に迎えられた。それは無理もない。自分のような洋行帰りはこれまで例の無い事であつたからである。これまでの洋行帰りは、希望に輝かがやく顔をして、行李の中から道具を出して、何か新しい手品を取り立てて御覧に入れることになつていた。自分は丁度その反対の事をしたのである。

東京では都会改造の議論が盛んになつていて、アメリカのAとかBとかの何号町かにある、独逸人の謂いう

ヴォルケンクラッツェル

Wolkenkratzer のような家を建てたいと、ハイカラア連が云っていた。その時自分は「都会というものは、狭い地面に多く人が住むだけ人死ひとじにが多い、殊ことに子供が多く死ぬる、今まで横に並んでいた家を、豎たてに積みかさ重ねるよりは、上水や下水でも改良するが好かろう」と云った。又建築に制裁を加えようとする委員が出来ていて、東京の家の軒の高さを一定して、整然たる外観の美を成そうと云っていた。その時自分は「そんな兵隊の並んだような町は美しくは無い、強いいて西洋風にしたいなら、寧むしろ反対に軒の高さどころか、あらゆる建築の様式を一軒ずつ

別にさせて、ヴェネチアの町のように参差錯落たる美観しんしを造るようにでも心掛けたら好かろう」と云った。

食物改良の議論もあつた。米を食うことを廃めて、沢山牛肉を食わせたいと云うのであつた。その時自分は「米も魚もひどく消化の好いものだから、日本人の食物は昔のままが好かろう、尤も牧畜を盛んにして、牛肉も食べるようにするのは勝手だ」と云つた。

仮名遣かなづかい改良の議論もあつて、コイスチヨーワガナワというような事を書かせようとしていると、「いやいや、

オルトグラフィイ

Orthographie はどこの国にもある、やはりコヒステフワ

ガナハの方が宜よろしかろう」と云った。

そんな風に、人の改良しようとしている、あらゆる方面に向つて、自分は本もとの空阿弥もくあみ説を唱えた。そして保守党の仲間おに逐い込まれた。洋行歸りの保守主義者は、後には別な動機で流行し出したが、元祖は自分であつたかも知れない。

そこで学んで来た自然科学はどうしたか。歸つた当座一年か二年はラボラトリウム *Laboratorium* に這はい入つていて、ごつごつと馬鹿正直に働いて、本の空阿弥説に根拠を与えていた。正直に試験して見れば、何千年という間満足に発展して

来た日本人が、そんなに反理性的生活をしていよう筈はない。初から知れ切った事である。

さてそれから一歩進んで、新しい地盤の上に新しい
フオルシユング
Forschung を企てようという段になると、地位と境遇と
 が自分を為事場しごとばから撥ね出した。自然科学よ、さらばで
 ある。

勿論自然科学の方面では、自分なんぞより有力な友達が
 が大勢あって、跡に残って奮闘していてくれるから、自
 分の撥ね出されたのは、国家の為めにも、人類の為めに
 もなんの損失にもならない。

只ただ奮闘している友達には気の毒である。依然として雰
 囲気の無い処で、高圧の下に働く潜水夫のように喘あえぎ苦
 んでいる。雰囲気の無い証拠には、まだ *Forschung* とい
 う日本語も出来ていない。そんな概念を明確に言い現す
 必要をば、社会が感じていないのである。自慢でもなん
 でもないが、「業績」とか「学問の推挽すいばん」とか云うよう
 な造語を、自分が自然科学界に置土産にして来たが、ま
 だ *Forschung* フォルシユング という意味の簡短かんたんで明確な日本語は無い。
 研究なんというぼんやりした語ことばは、實際役に立たない。
 載籍調べも研究ではないか。

こう云う閱歴をして来ても、未来の幻影を逐うて、現在の事実をないがしろ蔑ないがしろにする自分の心は、まだ元のままである。人の生涯はもう下り坂になって行くのに、逐うているのはなんの影やら。

「いか何にして人はおのれ己おのれを知ることを得べきか。省察せいさつを以てしては決して能あたわざらん。されど行為を以てしては或あるいは能よくせむ。汝なんじの義務を果さんと試みよ。やがて汝

*

*

*

の価値を知らむ。汝の義務とは何ぞ。日の要求なり。」
これは ギョオテ Goethe の ことば 詞である。

日の要求を義務として、それを果して行く。これは丁度現在の事実を ないがしろ 蔑にする反対である。自分はどうしてそう云う境地に身を置くことが出来ないだろう。

日の要求に応じて能事おわ畢るとするには足ることを知らなくてはならない。足ることを知るといことが、自分には出来ない。自分は永遠なる不平家である。どうしても自分のいない筈の所に自分がいるようである。どうしても灰色の鳥を青い鳥に見ることが出来ないのである。

道に迷っているのである。夢を見ているのである。夢を見ていて、青い鳥を夢の中に尋ねてうちいるのである。なぜだと問うたところで、それに答えることは出来ない。これは只単純なる事実である。自分の意識の上の事実である。

自分はこのままで人生の下り坂を下って行く。そしてその下り果てた所が死だということを知っている。

しかしその死はこわくはない。人の説に、老年になるに従って増長するという「死の恐怖」が、自分には無い。

若い時には、この死という目的地に達するまでに、自

分の眼前に横わっている謎なぞを解きたいと、痛切に感じたことがある。その感じが次第に痛切でなくなつた。次第に薄らいだ。解けずに横わっている謎が見えないのではない。見えている謎を解くべきものだと思わないのではない。それを解こうと[アインシュタイン](#)としてあせらなくなつたのである。

この頃自分は [Philipp Mainländer](#) が事を聞いて、その男の書いた救抜の哲学を読んで見た。

この男は [Hartmann](#) の迷まよひの三期を承認している。ところであらゆる錯迷を打ち破つて置いて、生を肯定しろと云うのは無理だと云うのである。これは皆迷みなまよひだが、死

んだって駄目だから、迷を追っ掛けて行けとは云われな
い筈だと云うのである。人は最初に遠く死を望み見て、
恐怖して面^{おもて}を背^{そむ}ける。次^ついで死の廻りに大きい圈を画
いて、震慄^{しんりつ}しながら歩いている。その圈が漸^{ようや}く小^{ちいさ}くな
って、とうとう疲れた腕を死の項^{うなじ}に投げ掛けて、死と
目と目を見合わす。そして死の目の中に平和を見出すの
だと、マインレンデルは云っている。

そう云って置いて、マインレンデルは三十五歳で自殺
したのである。

自分には死の恐怖が無いと同時にマインレンデルの

「死の憧憬^{しょうけい}」も無い。

死を怖れもせず、死にあこがれもせずに、自分は人生の下り坂を下って行く。

*

*

*

謎は解けないと知って、解こうとしてみせられないようにはなったが、自分はそれを打ち棄てて顧みずにはいられない。宴会^{きり}嫌いで世に謂う道楽というものがなく、碁も打たず、象棋^{しょうぎ}も差さず、球^{たま}も撞^つかない自分は、自然科

学の為事場を出て、手に試験管を持たなくなつてから、稀まれに画や彫刻を見たり、音楽を聴きいたりする外には、境遇の与える日の要求を果した間あいだあいだ々に、本を読むことを余儀なくせられた。

ハルトマンは人間のあらゆる福さいわいを錯迷として打破して行く間に、こんな意味の事を言っていた。大抵人の福と思つている物に、酒の二日酔ふつかえいをさせるように跡腹あとばらの病やめないものは無い。その無いのは、只芸術と学問との二つだけだと云うのである。自分は丁度この二つの外にはする事がなくなつた。それは利害上に打算して、跡腹

の病めない事をするのではない。跡腹の病める、あらゆる福を生^{しょうとく}得好かないのである。

本は随分読んだ。そしてその読む本の種類は、為事場を出てから、必然の結果でがらりと変った。

西洋にいた時から、^{アルハイヴェエ} Archive か ^{ヤアレスベリヒテ} Jahresberichte とか云う

ような、専門の學術雑誌を初卷から揃^{そろ}えて十五六種も取っていたところが、為事場に出ないことになって見れば、実験の細かい記録なんぞを調べる必要がなくなった。元来こう云う雑誌は学校や図書館で買うもので、個人の買うものではなかったのを、政府がどれだけ雑誌に金を出

してくれるやら分らないと思うのと、自分がどこで為事をするようになるやら分らないと思うのとで、数千巻買って持っていたが、自分はその中で専門学科の沿革と進歩とを見るに最も便利な年報二三種を残して置いて、跡は悉ことごとくく官の学校に寄附してしまった。

そしてその代りに哲学や文学の書物を買うことにした。それを時間の得られる限り読んだのである。

只その読み方が、初めハルトマンを読んだ時のように、饑うえて食を貪むさぼるような読み方ではなくなつた。昔世にもてはやされていた人、今世にもてはやされている人は、

どんな事を言っているかと、譬^{たと}えば道を行く人の顔を辻^{つじ}に立って冷澹^{れいたん}に見るように見たのである。

冷澹には見ていたが、自分は辻に立っていて、度々帽を脱いだ。昔の人にも今の人にも、敬意を表すべき人が大勢あったのである。

帽は脱いだが、辻を離れてどの人かの跡に附いて行くことは思わなかった。多くの師には逢ったが、一人の主には逢わなかったのである。

自分は度々この脱帽によって誤解せられた。自然科学を修めて帰った当座、食物の議論が出たので、当時の権

威者たる フオイト **Voit** の標準で駁撃はくげきした時も、或る先輩が「そ
 んならフオイトを信仰しているか」と云うと、自分はそ
 れに答えて、「必ずしもそうでは無い、しばら 姑くフオイト
 の墨に拠よつて敵に当るのだ」と云って、ひどく先輩に冷ひや
 かされた。自分は一時の権威者としてフオイトに脱帽し
 たに過ぎないのである。それと丁度同じ事で、一頃ひところ芸術
 の批評に口を出して、ハルトマンの美学を根拠にして論
 じていると、或る後進の英雄が云った。「ハルトマンの
 美学はハルトマンの無意識哲学から出ている。あの美学
 を根拠にして論ずるには、先ず無意識哲学を信仰してい

なくてはならない」と云った。なる程ハルトマンは自家の美学を自家の世界観に結び付けてはいたが、姑くその連鎖を断ってしまったとして見ても、彼の美学は当時最も完備したものであつて、しかも創見に富んでいた。自分分は美学の上で、やはり一時の権威者としてハルトマンに脱帽したに過ぎないのである。ずっと後になってから、ハルトマンの世界観を離れて、彼の美学の存立していられる、立派な証拠が提供せられた。ハルトマン以後に出た美学者の本をどれでも開けて見るが好い。きつと美の

モジファイカチオン

Modification

と云うものを説いている。あれはハルトマ

ンが翹はじめたのでハルトマンの前には無かった。それを誰も彼かれも説いていて、ハルトマンのハの字も言わずにいる。黙殺しているのである。

それはとにかく、辻に立つ人は多くの師に逢って、一人の主にも逢わなかった。そしてどんなに巧みに組み立てた形而上学でも、一篇の抒情詩じょじょうしに等しいものだと言うことを知った。

*

*

*

形而上学と云う、和蘭寺院樂の諧律かいりつのような組立てにアフロリスメンの倦うんだ自分の耳に、或時ちぎれちぎれの Aphorismen の旋律が聞えて来た。

生の意志を挫くじいて無に入らせようとする、シヨオペンハウエルの Quietiveクワイエチイフ に服従し兼ねていた自分の意識は、或時懶眠らんみんの中から鞭むちうち起された。

それは Nietzscheニイチエ の超人哲学であつた。しかしこれも自分を養つてくれる食餌しょくじではなくて、自分を酔えわせる酒であつた。

過去の消極的な、利他的な道德を家畜の群の道德とし

たのは痛快である。同時に社会主義者の四海同胞観を、あらゆる特権を排斥する、愚^{おろか}な、とんまな群の道徳としたのも、無政府主義者の跋扈^{ばっこ}を、欧羅巴^{ヨオロッパ}の街に犬が吠^ほえていると罵^{ののし}ったのも面白い。しかし理性の約束を棄てて、権威に向う意志を文化の根本に置いて、門閥の爲め、自我の爲めに、毒薬と匕首^{ひしゆ}とを用いることを憚^{はばか}らない Cesare Borgia ^{チェザレボルジア} を、君主の道徳の典型としたのなんぞを、真面目^{まじめ}に受け取るわけには行かない。その上ハルトマンの細かい倫理説を見た目には、所謂^{いわゆる}評価の革新さえ幾分の新しみを殺^そがれてしまったのである。

そこで死はどうであるか。「永遠なる再来」は慰藉いしやにはならない。ツアラツストラ Zarathustra の末期まつごに筆を下し兼ねた作者の情を、自分は憐あわれんだ。

それから後にも パウルゼン Paulsen の流行などと云うことも閱けみして来たが、自分は一切の折衷せつちゆう主義に同情を有せないの
で、そんな思潮には触れずにしまった。

*

*

*

昔別荘の真似事に立てた、膝ひざを容いれるばかりの小家に

は、仏者の百一物ひやくいちもつのようになんの道具も只一つしか無い。

それに主人の翁おきなは壁という壁を皆棚たなにして、棚という棚を皆書物にしている。

そして世間と一切の交通を絶っているらしい主人の許もとに、西洋から書物の小包が来る。彼が生きている間は、小さいながら財産の全部を保管している *Notar*ノタアルの手で、利足りそくの大部分が西洋の某書肆しよしへ送られるのである。

主人は老いても黒人種のような視力を持っていて、世間の人が懐かしくなった故人を訪とうように、古い本を読

む。世間の人^{いち}が市に出^いて、新しい人を見るように新しい本を読む。

倦^うめば砂の山を歩いて松の木立を見る。砂の浜に下りて海の波瀾^{はらん}を見る。

僕^{やそはち}八十八の薦^{すす}める野菜の膳^{ぜん}に向^むつて、飢^うを凌^{しの}ぐ。

書物の外で、主人の翁^{もてあそ}の翫^{もてあそ}んでいるのは、小さい

Loupe^{ルウペ}である。砂の山から摘^とんで来た小さい草の花など

を見る。その外^{ツアイス} Zeiss^{ツアイス} の顕^{けん}微^び鏡^{きやう}がある。海の雫^{しずく}の中にい

る小さい動物などを見る Merz^{メルツ} の望^{ぼう}遠^{えん}鏡^{きやう}がある。晴れた

夜の空の星を見る。これは翁が自然科学の記憶を呼び返

す、折々のすさびである。

主人の翁はこの小家に来てからも幻影を追うような昔の心持を無くしてしまふことは出来ない。そして既往を回顧してこんな事を思う。日の要求に安んぜない権利を持つていているものは、恐らくは只天才ばかりであろう。自然科学で大発明をするとか、哲学や芸術で大きい思想、大きい作品を生み出すとか云う境地に立ったら、自分も現在に満足したのではあるまいか。自分にはそれが出来なかつた。それでこう云う心持が付き纏まとっているのだらうと思うのである。

少壮時代に心の田地に卸おろされた種子は、容易に根を断つことの出来ないものである。冷眼に哲学や文学の上の動揺を見ている主人の翁は、同時に重い石を一つ一つ積み重ねて行くような科学者の労作にも、余所よそながら目を付けているのである。

ルキユウ デデュウ モオンド

Revue des Deux Mondes の主筆をしていた旧教徒

ブリュンチエール

Brunetière が、科学の破産を説いてから、幾多の歳月を

閲しても、科学はなかなか破産しない。凡てすべの人為のものの中の無常の中で、最も大きい未来を有しているものの一つは、やはり科学であろう。

主人の翁はそこで又こんな事を思う。人間の大厄難になつてゐる病は、科学の力で予防もし治療もすることが出来る様になつて来た。種痘で疱瘡ほうそうを防ぐ。人工で培養した細菌やそれを種うえた動物の血清で、窒扶斯チフスを防ぎ実扶的里ジフテリを直すことが出来る。Pestペストのような猛烈な病も、病原菌が発見せられたばかりで、予防の見当は附いてゐる。癩らいびよう病も病原菌だけは知れてゐる。結核もツベルクリン **Tuberculin** が予期せられた功を奏せないでも、防ぐ手掛りが無いこともない。癌がんのような悪性腫瘍しゅようも、もう動物に移し植えることが出来て見れば、早晚予防の手掛りを

見出すかも知れない。近くは梅毒が サルヴァールサン Salvarsan で直るようになつた。エリアス Elias Metschnikoff の楽天哲学が、未来に属している希望のように、人間の命をずっと延べること、或は出来ないには限らないと思う。

かくしてもはや幾何いくばくもなく、なっている生涯の残余を、見果てぬ夢の心持で、死を怖れず、死にあこがれずに、主人の翁は送っている。

その翁の過去の記憶が、稀まれに長い鎖のように、刹那の間に何十年かの跡を見渡させることがある。そう云う時は翁の炯々けいけいたる目が大きく睜みはられて、遠い遠い海と空と

に注がれている。

これはそんな時ふと書き捨てた反古ほごである。

日本文学電子図書館

山椒大夫・高瀬舟

著 者：森 鷗外

作成者：宮澤一郎

出版社：新潮文庫、新潮社



日本文学電子図書館